

後期ベンヤミンにおける解釈の理論 — ボードレー論注釈 — (1)

久 保 哲 司

(人文学部独文研究室)

Theorie der Interpretation beim späten Benjamin — Anmerkungen zu seinen Baudelaire-Studien — (1)

Tetsuji KUBO

(Deutsches Seminar, Humanistisches Fakultät)

序にかえて — 唯物論的文学理論の問題と後期ベンヤミンの思考

「唯物論美学は有意味な形で可能か^(*)」— これは、1975年に西ドイツで出た、『唯物論的文学理論 — その対象規定のための論考集』の中の一文である。この本は、60年代末から70年代前半の西ドイツにおける、唯物論美学をめぐる議論の高まりの中で生まれたものであるが、上のような問いかけがなされること自体、この対象領域すなわち唯物論美学なるものがいまだ確立していないことを示している。少くとも著者ボクダルらはそう見ているわけである。それから15年近く経つが、その間にこの問いに対する満足すべき解答が得られたようには見受けられない。この本が出版された頃の状況と比べて、現在ではむしろ唯物論美学というテーマそのものがやや passé の感があるとすら思えなくもない。

ボクダルらによれば、そもそも上の60年代末から70年代前半にかけての西ドイツにおける論議は、一旦中断されたものの再開であった。つまりマルクス・エンゲルス以来今世紀20年代までに行われた議論の中で生まれてきたさまざまな重要な論点は、十分に展開されぬうちに、30年代におけるマルクス主義の教条化、「社会主義リアリズム」の公式化によって隠蔽されてしまい、またそれ以後は第二次世界大戦とそれに続く東西対立という政治的・歴史的状況の中で、抑圧され忘れられたままになっていたのである^(**)。そして恐らくは68年を大きな契機として、そのような問題関心が再び西ドイツで高まることになったと思われる。従って現在は、この熱がまたもや冷めてしまったということになるのかも知れない。しかしそれならそれで、上の問題をもう一度考え直してみる機会が来ているとも言えるのではないか。

唯物論美学は、マルクスの『経済学批判』序文の中の有名な公式に淵源をもち^(***)、プレハーノフとメーリングによって創始され、ルカーチによって一応の完成をみたが^(****)、その古典的

(*) Bogdal, Klaus-Michael u. a.: Materialistische Literaturtheorie und die Kontinuität bürgerlicher Kunstideologie, in: Bogdal, Klaus-Michael u. a. (Hg.): Arbeitsfeld: Materialistische Literaturtheorie, Ffm. 1975, S. 27.

(**) 以上, Bogdal, a. a. O., S. 13f. を参照。

(***) Vgl. Marx, Karl: Zur Kritik der Politischen Ökonomie, Vorwort, in: Marx/Engels: Werke, Bd. 13, Berlin 1964, S. 8f.

(****) ルカーチの反映論のコンパクトなモデルは、論文 "Kunst und objektive Wahrheit" (in: Lukács, Georg: Werke, Bd. 4, Neuwied und Berlin 1971, S. 607-650) に見られよう。

図式は周知の通り、一つの社会的意識である芸術は、客観的現実を「反映」というものである。この「反映」を機械的に解釈することに対してすでにマルクスが、エンゲルスが、そしてレーニンが警告を発していることは、多くの論者によって指摘されてきた^(*)。結局のところ、この「正統マルクス主義的」と呼ばれる理論は、一種の「袋小路」(F・コッペ^(**))に入りこんでしまった、というのが現在一般に認められている見方のようなのである。コッペやイーグルトンも言うように、「反映理論」が精緻に、複雑になればなるほど、そもそも「反映」という言葉を使うことに意味があるかどうか疑わしくなってきたのである^(***)。

この袋小路からの抜け道はあるのか——先のボクダルらの著作も、このような問題状況を前提としていると思われる。この本の総論に当たる章において、著者らは自分たちの唯物論美学の構想をスケッチしているのだが^(****)、彼らは、以上の脈絡を踏まえてであろう、「反映」という語を避ける。そこで問題となるのは——ここではあくまで「唯物論」美学の可能性が問われているのであるから——「反映」の語を捨てた時、唯物論の基本的図式に変更が加えられるのかどうか、ということであろう。ボクダルらはまず、「最終的審級 die letzte Instanz において規定者^(*****)」である「土台」と、「相対的自律性^(*****)」を認められる「上部構造」という図式は、「基本的公理^(*****)」として前提されると言う。つまり「規定者としての土台」ということは、「唯物論」の立場を保持しようとする限り放棄されえなると考えられているわけである。その上で著者らは以下の点において自分たちの理論的前進を見る。すなわち、文学作品があるものの「反映」という考え方を避けることによって、文学理論のアクセントは、文学の「認識作用」にはもはや置かれなくなる。それに代わって、文学もまた「実践=生産」の特殊な一形態であるという新しい見方が成立しうる、というのである^(*****)。

この発想が誰よりもベンヤミンに、とりわけその論文『生産者としての作家』(1934)に触発されて生まれたものであろうことは想像に難くない。次の一節はこのベンヤミンの論文のプログラムである。

「ある文学が、その時代の生産諸関係に対してどういう立場にあるか、を問うまえに、私は次

(*) ちなみに機械的決定論者のように言われるメーリングにおいてすら事情は単純ではない。彼の反映論に関して、『自然主義について一言』の中の、「宗教上の観念や、法律・政治上の諸制度がそうであるように、諸国民の芸術的および文学的的制作もまた、根底的にはその国民の経済的發展闘争によって規定されている」(Mehring, Franz: Werkauswahl III, Darmstadt und Neuwied 1975, S. 7) という一文がよく引き合いに出されるが、そこでも「根底的には im letzten Grunde」という限定が入っていることに注意すべきであろう。また同じ文章の先の方では次のように言われている。文学が時代の階級闘争の中で占める地位を考察するということは、「文学を政治傾向の軌に服させるということではなく、政治的・宗教的思想、文学的・芸術的思想、そして一般にあらゆる思想が共有している根にまで遡ってみることなのである。」(a. a. O., S. 10f.) 以上の点についてはラダッツ論も参照のこと (Raddatz, Fritz J.: Die Mehring-Legende, in: ders.: Revolte und Melancholie, Ffm. 1982, bes. S. 95)。

(**) Koppe, Franz: Grundbegriffe der Ästhetik, Ffm. 1983, S. 71. ルカーチの反映論の問題点については同書 S. 59-71, またテリー・イーグルトン (有泉学宙他訳) 『マルクス主義と文芸批評』, 国書刊行会, 1987年, の特に76頁以下をも参照のこと。

(***) Vgl. Koppe, a. a. O., S. 70, イーグルトン, 前掲書, 77-78頁。

(****) Bogdal, a. a. O., S. 13-30.

(*****) a. a. O., S. 14.

(*****) ebd.

(*****) ebd.

(******) Vgl. a. a. O., S. 15.

のことを問うてみたい。つまり、文学が生産諸関係の中でどういう立場にあるのか、ということ。」(強調ベンヤミン)(*)

ベンヤミンの独創は、「上部構造」と呼ばれていたものを、「土台」と呼ばれていたものの中に移し入れたことである(従ってこれら二つの契機を「上部構造」および「土台(下部構造)」と呼ぶことはもはやふさわしくなくなるであろう)。上部構造—土台の図式(その中では二契機は対立関係にある)は打破される。従ってこれは、コッペの言うように、先の「袋小路」からの一つの「脱出路(**)」を示しており、しかもこれこそ「本来的に唯物論的な解決の試み(***)」なのだということになる。

生産の一形態として文学を考察するというこの構想は、しかしながら新たな問題を生み出すであろう。まず工場労働者の労働と詩人が詩を書く行為とは、少くとも一見したところは非常に異なる。この二つを同一のカテゴリーで捉えることは、「有意義な形で可能」なのであろうか(****)。もし可能だとすれば、そのとき「美的なもの特性」といったものはどこに求められるのか。それともこの問い自体が立てられぬことになるのか。

次に、芸術を生産の一形態として土台に移し入れるという発想をボクダルらはベンヤミンから受け継いだわけであるが、そのとき、ボクダルらの言う「基本的公理」、すなわち「土台」が「最終的審級において規定者である」ということは一体どのような意味を持つのか、これが第二の問題となる。またこのように見てくると、マルクスのかの公式は、ベンヤミン自身においてはどうか考えられているのかも問われなければならなくなるであろう。

以上、正統マルクス主義の文学理論=反映論に代わるべき別の唯物論美学の試みの一つとしてのボクダルらの構想を、そしてそのもとになったと思われる後期ベンヤミンの思考を紹介した。そこで本論では、もう一度ベンヤミンに立ち返り、具体的な批評作品を手がかりに、そのような思考の射程を検討してみたい。先の『生産者としての作家』は、ブレヒトに関するベンヤミンの一連の仕事に属すると言えるが、本論で考察されるのは、むしろボードレールに関する諸論考である。具体的な考察に入る前に、これを取り上げる理由を以下に述べておくことにする。

後期ベンヤミン、マルクス主義者を自認したベンヤミンのいわゆる「著者」——『パリのパサージュ』は、周知のように膨大な断片の山のまま残された。そしてこの研究の一環として始められ、次第に独立して一冊の本の形を取りつつあった「ボードレール論」もまた、その一部分が完成されたに過ぎなかった。「ボードレール論第二部」としての『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』、及びそのまた一部分の改稿である『ボードレールのいくつかのモチーフについて』がそれである。この改稿は、原稿依頼者であるアドルノ(とホルクハイマー)の要請によってなされた。すなわちアドルノが『第二帝政期のパリ』の方法を厳しく批判したのに答えて、『いくつかのモチーフに

(*) Benjamin, Walter: Gesammelte Schriften, hg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Ffm. 1972ff., Bd. 2, S. 686. 以下ベンヤミンの著作からの引用はこの全集に拠り、本文中の引用末尾に略号(GS), 巻数(ローマ数字), 頁数(アラビア数字)を記す。

(**) Koppe, a. a. O., S. 71.

(***) ebd.

(****) ボクダルらにしても、あらゆる労働を簡単に同一視してよいと考えているわけではない。「社会的な生産過程というものを、異常に孤立した人間でさえもが、あらゆる社会的助力なしに行うことができるに違いないような、単純な労働過程と混同してはならない。」(Bogdal, a. a. O., S. 19) ベンヤミンにはこの混同への傾向があると言えなくもない。たとえば、『ボードレールのいくつかのモチーフについて』における、賭博者の手の動きと機械を前にした労働者のその類比を論じた部分(GS I, S. 632)を参照のこと。

ついで』が書かれたのであるが、このアドルノの批判は、まさに上に述べたような唯物論美学の根本問題に触れるものであった。となれば、この二つの論文及びそれをめぐるベンヤミンとアドルノの論争を再検討することにより、先の「もう一つの唯物論美学」の可能性と限界を明らかにするひとつの手がかりが得られるはずである。後期ベンヤミンの様々な仕事の中でも、このボードレールに関する諸論考は、理論面と実践面の両方において、最も豊富な考察材料を提供してくれるのである。本論でボードレール論を扱う所以である。

I 『第二帝政期のパリ』とアドルノの批判

1. 文学と歴史・社会

1938年9月末、『第二帝政期のパリ』の原稿と共にホルクハイマーに送った手紙の中で、ベンヤミンはこの論文の方法的意図について次のように述べている。

「本全体（一冊の独立した「ボードレール論」のこと——引用者注）の哲学的基礎はこの第二部からは見てとり得ないものであり、また見てとり得るものであってはならない、ということが重視されねばならないのです。第三部——これは「詩の対象としての商品」と題されるはずですが——は、第一部からも第二部からも窺い得ないように計画されています。このことは単に、第二部を独立させるために必要だったというだけではなく、構成からして決まっていたのです。この構成においては、第一部——アレグリー詩人としてのボードレール——は問題を設定し、第三部はその解決を行います。第二部は、この解決のために必要なデータを提供します。この第二部の機能は、一般的な言い方をすれば、アンチテーゼのそれです。そこでは（中略）詩人を社会批判的に解釈することが試みられます。このような解釈は、マルクス主義的解釈の一つの前提ですが、しかしそれだけではその概念を満たすものではありません。これを行うのは、第三部のために残されています。」(GS I, S. 1091)

このような意図に従って、「第二部」すなわち『第二帝政期のパリ』は、「コラージュ」あるいは「モンタージュ」風に構成されている。素材はまず、ボードレールが生きた第二帝政期のパリの社会の諸現象であり、その中でとりわけ重要なのが大都市の成立と大衆 *Masse* (あるいは群衆 *Menge*) の出現にかかわる諸現象である。特徴的なのは、ここに挙げられている種々の事柄には、一般的な歴史記述（そこでは普通政治・経済・社会上の重大事件が中心となる）では無視されるような、一見末梢的なものが多いということである。ナポレオン三世やブランキに触れても、前者においては「真意を見抜き難い皮肉」(GS I, S. 514) に、後者においてはその「黒い手袋」(GS I, S. 519) にベンヤミンはことさらに注目する。

些細なものへのベンヤミンの好み、「Nebenbei への感覚」(E. ブロッホ^(*)) ということがよく言われるが、これは単に個人的な趣味として片づけられない問題である。少なくともそう言って済ませられない場合がある。その例がまさにこのボードレール論なのである。なぜなら、上の方法的意図の説明の末尾にあったように、ベンヤミンはここでマルクス主義的解釈という理論要求を自らに対して出しているからである。プフォーテンハウアーが指摘するように^(**)、この理論要求と、

(*) Bloch, Ernst: *Erinnerungen*, in: *Über Walter Benjamin*, Ffm. 1968, S. 17.

(**) Vgl. Pfothenauer, Helmut: *Ästhetische Erfahrung und gesellschaftliches System, Untersuchungen zum Spätwerk Walter Benjamins*, Stuttgart 1975, S. 1.

些細なものへの興味は矛盾関係にある。と言うのは、マルクス主義にとって重要なのは、「普遍妥当的な法則性^(*)」を捉えることだからである。従ってここには、普遍と特殊、法則と例外、全体と個別という歴史哲学上の根本問題が現れてこざるを得ない（これが唯物論美学においてこそ重大なアポリアとなるであろうことは、すぐに予想がつく）。かつてベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』において、「極端なもの」の概念をもって一つの歴史哲学認識論を提出し^(**)、それによってバロック悲劇論の叙述を行なったが、そのバロック論と、ボードレール論の母胎である「パサーージュ」研究とをベンヤミン自身ある手紙の中で対比したことがあり、その際、パサーージュ論にも「認識論」の章が設けられるかも知れない、と述べられていた^(***)。現在『歴史の概念について』と呼ばれているものが結局それに当たるのであろうと研究者たちによって考えられているが、しかしそこでは上の問題、すなわち歴史の全体と個別的なものの関係は理論的に解決されていないと言わねばならない^(****)。ともかくこの『第二帝政期のパリ』における歴史的・社会的なものの捉え方が、一般の歴史学や社会学のそれとは相当に異なっていること、そしてそれは複雑な問題性をはらむものであることに注意しておくべきであろう。

さて論文中にはこのような歴史的・社会的諸現象と並んで、文学作品およびそれにまつわる多様な事柄が述べられるのだが、両者の関係は、多くの場合まさに並置されているに止まる。論文の第一章「ラ・ボエーム」は、ブランキとボードレールの類比のモチーフをもって始まり、第三章「近代」は次の一文をもって終わる——「ブランキの行為は、ボードレールの夢の同胞だった。両者は絡まりあっていた。ナポレオン三世が、六月の闘争に加わった人々の希望を葬った、その石の上で絡まりあっている、二つの手だった。」(GS I, S. 604) このような文章によって、何が言われていることになるのか。

ここで、ベンヤミンがボードレール論へ向かった際の基本的関心は何であったかということをし振り返ってみたい。「パサーージュ」研究の中心問題は「19世紀の根源的歴史」^(*****)である、と1935年の時点で言われていた。この言い方のみからすれば、重要なのは「歴史」であり、文学はその一要素とされている、と解釈することもできる。無論その際「根源的歴史 Urgeschichte」なるものがどういう意味で言われているのかが——バロック論におけるその用語法とも関連させて——問われなければならない。この大問題はここでは措かざるを得ないが、このことを念頭に置いた上で、このボードレール論第二部における歴史的なもの（それは第二帝政期の事象である限り、「社会的なもの」と言っても同じである）と文学との関係はどのようなになっているかを考えてみようとするとき、たとえば先のブランキとボードレールに関する一文は、いかにも曖昧であり、手がかりを与えてくれない。

以上のような、歴史的・社会的なものと文学との関係の問題（そしてこれに交差するものとして、全体と個別の関係の問題があると言える）は、この第二部では理論的に扱われていない。そしてそれは意図的なものであった。が、原稿を読んだアドルノは、まさにこの意図がすでに間違っていると主張するのである。

(*) ebd.

(**) Vgl. GS I, S. 214f.

(***) 1935年5月31日アドルノ宛ての手紙 (Benjamin, Walter: Briefe, hg. und mit Anmerkungen versehen von Gershom Scholem und Theodor W. Adorno, 2 Bde., Ffm. 1978, S. 664)。なおパサーージュ論草稿の中には、「認識論的なもの、進歩の理論」と編者によって題された一群があるが (GS V, S. 570-611)、これについての検討は他日に譲りたい。

(****) たとえば第IVテーゼ末尾の文章 (GS I, S. 694f.) はこの問題に触れるだろう。

(*****) Benjamin: Briefe, a. a. O., S. 664.

2. アドルノの批判とベンヤミンの反論

アドルノはその詳細な批判において、やはりまず「モチーフは集められているが、展開されていない」(GS I, S. 1094^(*))という点を不満とする。彼はそれが意図的であることは勿論承知している。しかしこのような方法的意図、アドルノに言わせれば解釈に対する「禁欲」(ebd.)は、これらの対象にふさわしいものであるのか、と彼は問うのである。

「理論的解釈抜きのパノラマと『痕跡』、遊民とパサーージュ、近代と常に同一なるもの、これらはおのれ自身のアウラによって侵食されることなしに、忍耐強く解釈されることを待ってられるような『素材』なのでしょうか。むしろそれらの対象の事実的な内容は、もしそれだけを切り離すならば、ほとんどデモーニッシュな仕方、それが解釈される可能性に対して謀反をおこすのではないのでしょうか。」(強調アドルノ) (ebd.)

アドルノはベンヤミンの論文が「メタファー的」(GS I, S. 1095)な言い方をしている箇所について不満を抱く(前節で述べたことからしても、この論文の叙述スタイルは全体としてメタファー的であり、先に引用した、ブランキとボードレールに関する文もその一例であると言える)。アドルノはメタファー的な言い方そのものが悪いと言っているわけでは必ずしもないのだが、それにしてもアドルノ自身の批判にもこうした「デモーニッシュ」とか「謀反をおこす」という表現が多用されているのを見ると、ややアドルノにも文句をつけたい気になる。メタファーはどこまで有効であり、どこで「単なる『かのように』」(ebd.)となり下がるのか。アドルノの論旨をもう少し先まで追ってみよう。上述のような「解釈に対する禁欲」と深く関連するものとして、アドルノはベンヤミンの論述に、誤った弁証法的唯物論を見るのである。

「ここでできる限り単純かつヘーゲル的のものを言うことをお許し下さい。私の思い違いでなければ、この弁証法にはあるものが欠けています。つまり媒介です。ボードレールにおける事実的な諸内容を、それらと近い、その時代の社会史の諸特徴に——しかもできる限り経済的なものに——直接に結びつける傾向が全体に支配的です。」(ebd.)

要するにベンヤミンの「方法」は結果として俗流マルクス主義と同じことになってしまうのであり、解釈の禁欲、理論の保留こそがまさにこうした間違った解釈、誤った理論を生みだす、というのである。アドルノは一例として、ワイン税とボードレールの詩『ワインの魂』の関連づけを挙げている^(**)。文学的事象と経済的事象が理論抜きに並置されるとき、両者の関係は単なる「かのように」のそれとなる。メタファーが有効なのは、それが理論に支えられている場合のみであるとアドルノは考えているのであろう。その際の理論とは、「客観的」なものでなければならないはずである。このコンテキストで言うなら、科学的な経済分析を基盤とするものでなければならない。アドルノはベンヤミンに対してそのような「理論」、つまり「正しい」弁証法的唯物論を教えようとするのである。

「文化上の諸事象の唯物論的な規定は、総過程 Gesamtprozess を媒介としてのみ行いするので。」(強調アドルノ) (GS I, S. 1096)

ここでアドルノは、先の引用の中で自ら認めている通り、ヘーゲル的である。ヘーゲルとマルク

(*) アドルノのベンヤミン宛ての手紙も前記ベンヤミン全集から引用する。

(**) Vgl. GS I, S. 1096, ただしベンヤミンのテキストに引用されている詩は『屑屋の酒』である (Vgl. GS I, S. 520)。

スに関してはベンヤミンよりも精通していたであろう彼は、ここでベンヤミンに対して先生として振舞っているかのようである。

問題は、アドルノのヘーゲル主義的マルクス主義と、ベンヤミン独自の「唯物論的方法」の対立、と整理できる。理論に支えられた解釈抜きに素材を並列するコラージュないしはモンタージュ風の構成には、アドルノが触れているように、ベンヤミン自身においてすでにブルースト論やシュールレアリズム論といった先例があり、そこでのこの「方法」は成功しているとアドルノは認めている(*)。さらに、『ドイツ悲劇の根源』に始まるベンヤミンの中期以降の作品は、すべてこのような形式をもって書かれていると言っても言い過ぎではない。バロック論では序章において、哲学的表現の方法論が述べられているが、そこで宣揚されているのは、省察の中断によって生みだされる「思考断片」(GS I, S. 208)の「モザイク」(ebd.)という叙述方法であり、バロック論の本文はこの方法に従って書かれている。そして真理とは、そのような断片の全体から浮かび上がるものとされているのである。従って、バロック論においてはモザイク風構成は一応の理論づけをされている。このような叙述論・真理論が妥当性を持っているかどうかは今不問に付すとして、他にブルースト論等の例もあるわけだから、モザイク的な叙述形式そのものが悪い、というのではないはずである。先で引用したように、アドルノはこの方法をあれらの対象に適用したことが間違いだと見ているのである。この適用のさいには、かつて方法を支えていた理論は機能しなくなってしまう、と彼は考えているのであろう。それではブルースト論等の対象とこのボードレール論のそれとはどこが違うのか。先の引用箇所だけでなく、アドルノの立論全体から考えれば、最も重要な違いはやはり、後者においては「土台」に属する諸事象が多く扱われているという点であろう。「ワイン税」の場合のように、経済的事象と文学的事象の関係が問題となる場合には、「正しいマルクスの方法」が適用されねばならぬのであり、ベンヤミン流のそれでは駄目なのだとアドルノは言いたいのである。さらに彼は、マルクスを間違えて使うくらいならばいっそ使わぬほうがまだ、という意味のことさえ述べている。自分を曲げてまでマルクス主義に接近しようとししないで、自分本来のやり方を貫く方が、ベンヤミン自身にとっても、弁証法的唯物論にとっても(そして「社会研究所」にとっても)最良のことなのだというのである(**)。「ワイン税や、雑文家の振舞いからの幻像の演繹などよりも、親和力論とバロック論のほうが良質のマルクス主義なのです。」(GS I, S. 1098)この一文は、われわれの問題設定にとって極めて興味深い。それは単なる激励なのか、それとも文字通り受取ってよいのか。念のために言い添えておけば、親和力論とバロック論は、ベンヤミンがマルクス主義に接近する前に書かれたものである。ただし後者については著者自身、「それは確かに唯物論的ではないが、すでに弁証法的ではある(***)」と述べたことがあった。このことは、あの本の事実的内容(たとえばアレゴリーの弁証法)にかかわることなのか。それとも方法、つまり叙述形式ないしは構成がそうだというのであろうか。

内容的な面に関して言えば、親和力論あるいはバロック論においても、文学以外の事象は取り上げられている。たとえば前者における「結婚(****)」, 後者における政治理論(*****)である。しかしこれらはマルクス主義の理論に従えば、「上部構造」に属するものであって、「土台」に属するものはそこには現れない。その意味ではたしかにこれらの著作においては、扱われた内容からして唯物論の出る幕はない。それでは方法の面ではどうか。そこでは文学的事象も文学外的事象も、「哲

(*) Vgl. GS I, S. 1094.

(**) Vgl. GS I, S. 1097.

(***) Benjamin: Briefe, a. a. O., S. 523.

(****) Vgl. GS I, S. 127ff.

(*****) Vgl. GS I, S. 245ff.

学的経験」(GS I. S. 127)において、「事象内実」(ebd.)として把握される(「事象 Sache」[GS I. 128]と「事象内実 Sachgehalt」とは存在位相が異なることに注意)。つまりここには上部構造—土台という区分は存在しないのだから、権利問題としては、いわゆる土台に属する事象も扱われるはずである。あらゆる種類の事象は「経験」において事象内実へと変換され、そして「事象内実への完全な洞察は、(中略)真理内実へのそれと重なり合う」(GS I. S. 128)。「事象—事象内実—真理内実」という構造、そしてそれを成立させる「経験」というカテゴリー(と一応呼んでおく)、これが初期—中期ベンヤミンの認識論である。バロック論序章では用語法も変えられ、構造もより複雑になっているが、発想は基本的には同じである。そこでは「事象」の代わりに、主として「現象」(GS I, S. 214)という語が用いられ、「事象内実」は「理念」(ebd.)に対応し、「真理内実」は簡単に「真理」(GS I. S. 213)と呼ばれる。そして「現象」と対比して、理念と真理は「存在」(GS I, S. 210)であることが強調される。これは断固たる観念論である。しかし観念論は、「存在」の定義如何で、唯物論に塗り変えられないことはない。上記の構造を唯物論的認識論へと転換させることも可能ではないのか。そのとき問題となるのは「経験」という語の厳密な意味であろう(これは親和力論においてもバロック論においてもアキレス鍵となっている箇所のように思われる)。以上のことからして、アドルノがこの二者を「マルクス主義」と呼ぶ理由も分からないではない。ただしそれは正統マルクス主義とはやはり異なるものであろう。つまり彼の言葉を顔面通り受け取るなら、アドルノはここで正統マルクス主義とも、そして勿論『第二帝政期のパリ』における事実上の俗流マルクス主義とも異なる、第三のマルクス主義があり得ると言っていることになる。この解釈が正しいかどうかは分からない。しかし先取りして言えば、『いくつかのモチーフについて』は、この第三の方向を取ることにある程度成功しているのである。このことは次章で詳しく論ずるが、この論文は以上のようなベンヤミンの仕事の一つの総決算であると言える。そして、そこでの理論的な中心概念は他でもない「経験」なのである。

さてこの批判に対してベンヤミンは1938年12月9日付の手紙で反論を試みた。そこで彼は、この第二部は「主として文献学的な素材から形成され」(GS I. S. 1103)、「解釈」は第三部に取っておかれるという意図を今一度強調し、ワイン税に関する箇所についても、それは「正統的なしかたで、文献学的な関連において作り出された」(GS I. S. 1104)という言い方で応戦している。彼はアドルノの批判のいくつかの点には納得しているものの、基本的には元来のプランにあくまで固執している。この手紙の中で何度も「理論」という言葉が使われるが、その内容は論文第三部に現われるものとされ、ここでは具体的には述べられない。

この批判—反批判は明らかに噛み合っていない。それは両者の基本的思考カテゴリーが異なるからである。アドルノは「上部構造—土台」の関係、そして「全体—部分」の関係を問題にしている。一方ベンヤミンはこのような問題の立て方を回避しているように見える。アドルノが力をこめて主張した、総過程による媒介の要求に、ベンヤミンは応答しない。反論の手紙の中で彼が、「文献学」という言葉をしきりに強調するのは、きわめて特徴的である。なぜなら文献学においてこそ、「神は細部に宿り給う」からである。なるほど文献学においても、全体の解釈なしには部分の解釈はありえない。しかしベンヤミンの言う文献学とは、そのような整合性を旨とする学問知ではない。隠されていたものを掘り起こす楽しみであり、あの Nebenbei への感覚が満たされる喜びである。それは「客観性」を意に介さない。ベンヤミンの引用のやり方はしばしば恣意的である。

アドルノの、「あなたは自分を曲げてまで弁証法的唯物論に近付こうとした」という言葉に対して、ベンヤミンは次のように答える。

「自分の生産的な関心の名において、ある秘教的な思想を展開することに習熟し、その限りに

において、弁証法的唯物論と研究所との関心を無視して仕事に向かうことを、私は拒否したのですが、そこに働いていたのはつまるところ、研究所との連帯のみではなく、また弁証法的唯物論への単なる忠誠ではなかったのです。そうではなくて、私たちみながこの15年間にしてきた経験との連帯だったのです。」(GS I, 1103) (強調引用者、研究所とは「社会研究所」のこと)

15年前と言えば1923年である。この年の末にかの大インフレーションが終焉を迎え、ヴァイマル共和国は相対的安定期に入った。従ってこの15年間とは、共和国の「黄金時代」と、29年からのその崩壊期、そして33年以降のヒトラー政権の時代である。ベンヤミンの個人史においては、『ドイツ悲劇の根源』執筆(1924/25年)、フリーの文筆業者としての活動の開始(1926年以降)、そして亡命(1933年以降)とつづく歳月である。この歴史的状況が自分をしてあのような方向を取らせたのだとベンヤミンは言うのである。また上のように歴史の歩みとベンヤミンの仕事の内的展開とを重ね合わせてみると、確かに意味深い一致が各所に見出される。

亡命後のベンヤミンが、研究所に経済的にどれだけ依存していたのか、そのことによってどのような心理的葛藤が生じたか、ということはここでは詳らかにしない。上の弁証法的唯物論の受容をめぐる論争にはそのような背景があること、そして先の引用の強調部分は1966年の『書簡集』では削除されており、そのことが編者アドルノに、意図的歪曲を行なったという非難をもたらしたという事実だけを指摘しておきたい。本稿の関心はベンヤミンの方法のありようをさぐることであり、弁証法的唯物論の他のヴァリエーションとの関係におけるその位置である。先の引用に続く箇所はこうである。

「つまりここでも私のきわめて独自の生産的関心が問題になっているわけです。それが元来の関心に時として暴力を加えようとする可能性がある、ということを否定するつもりはありません。そこには一つの敵対関係があり、自分がそこから脱却しているとは夢にも思いません。この敵対関係の克服がこの論文の課題であり、これは論文の構成の問題になるのです。」(ebd.)

パサージュ論・ボードレール論の様々なモチーフは、ベンヤミンの本来の思考様式の中で育ってきたものである。それと方法として採用された弁証法的唯物論との対立は、ボードレール論全体の構成において解決されるというわけである。つまり元来のプランであったテーゼーアンチテーゼージュンテーゼの三部構成である。この手紙には次のような表現も出てくる。「著者の文献学的解釈は、弁証法的唯物論者によってヘーゲル的に止揚されなくてはならない。」(GS I, S. 1103) ただしこのような言い方は、学生時代からカンティアンではあれ、ヘーゲリアンでは必ずしもなかったベンヤミン(*)としては、むしろ異例である。「研究所向け」の発言ではないかとさえ思えなくもない。この言葉の背後にあるベンヤミンの心理状態はここでも問わぬとして、しかし次のことだけは注意しておく必要がある。元のプランにおける弁証法的構成は、ヘーゲル弁証法に完全に従うものであったのか(**)。

(*) ベンヤミンは1930年のショーレム宛ての手紙で、「(パサージュ論の) 仕事全体にしっかりした足場を与えるためには、ヘーゲルのいくつかのアスペクト(中略)を研究することが必要だ」(Benjamin: Briefe, a. a. O., S. 506) と述べている。また1935年のある手紙では、『パリ——19世紀の首都』について、「この仕事は、シュールレアリスムの哲学的な活用 Verwertung —— と同時にその揚棄 Aufhebung —— である」(a. a. O., S. 685) と言われている。しかし後期ベンヤミンが実際ヘーゲルをどの程度受容したか、ティーデマンの言う如く、「ヘーゲル受容」(Ritter, Joachim (Hg.): Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd. 1, Basel/Stuttgart 1971, Sp. 919 [Stichwort "Bild, dialektisches"]) と名づけられるほどの事実があったかどうかは、未だ研究の余地があると思われる。

(**) ちなみに親和力論もこのような弁証法的三部構成とされている (Vgl. GS I, S. 835ff.)。

これまで考察してきた限りでは、ベンヤミンがともかくも弁証法的唯物論と呼んでいるものの実体は、『第二帝政期のパリ』には現れていないと言わねばならない。後期ベンヤミンにおける弁証法について主観的に論じようとするなら、論文の中には現れないが、反論の手紙の中では使われている「弁証法的像 *das dialektische Bild*」(GS I, S. 1104) という語がむしろ鍵概念となろう。しかしながら、これは以前に『パリ — 19世紀の首都』において導入されて以来^(*)、『セントラル・パーク』を経て^(**)、最晩年の『歴史の概念について』における「像としての歴史」の考え方^(***)に至るまで一連の系列をなしており、これらについて扱うことは本論の枠を超えることになるので、それは差し控えることにし、本章では最後に、先に「アドルノのヘーゲル的立場」と簡単に呼んでおいたものにもう少し触れておきたい。ただし本論はアドルノ研究ではないので、ベンヤミンの立場を逆照射するような点だけを指摘するにとどめる。

先に引用した「総過程」に関する一文であるが、まず第一に、ここで言われる「総過程」とは、正確には何を指すか、ということを考えてみたい。そこに続く箇所はこうなっている。

「ボードレールのワインの詩が、ワイン税と税関に動機づけられているとしても、これらのモチーフがボードレールの作品の中に回帰してくる場合、この事態は時代の社会的・経済的総傾向を通じてのみ規定されるのです。あなたの問題設定のしかたからすれば、きわめて厳密に考えるなら、ボードレールの時代における商品形式の分析を通じてのみ、ということになります。」(GS I, 1096)

「総過程」→「社会的・経済的総傾向」→「商品形式の分析」と、「媒介するもの」ないしは「規定を仲介するもの」が次第に限定されてきている。アドルノはこの手紙の中で「上部構造」(ebd.)及び「下部構造」(ebd.)という言葉も用いているが、これらはマルクスにおいては、それぞれ「社会的・政治的・精神的生活過程一般^(****)」及び「生産諸関係の総体^(*****)」という意味であった。アドルノの論においては、媒介するものが、最初は、マルクスの言う意味での下部構造だけでなく、上部構造をも含む諸関係の総体として考えられているように見え(「総過程」)、次に「社会的・経済的」という限定が加えられ(「社会的」ということの意味範囲は明らかではないが)、最後にマルクスの言う「下部構造 (=経済構造)」に一致することになるように思われる。

同時に注意しておきたいのは、「媒介」ないし「規定」についてのアドルノの考え方である。マルクスにおいては、下部構造は上部構造を規定するとされていた。「人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在がその意識を規定するのである」^(*****)。「序にかえて」で触れたボクダルの主張 — 「土台」 (=下部構造) が「最終的審級において規定者である」という命題を「基本的公理」とする立場 — はこのマルクスの言い方に忠実である。しかしそこにはどうしても「経済優先」、従って機械的反映論に墮する危険がある。それに対してアドルノにおいては、下部構造が上部構造を規定する、つまり下部構造が規定の主体であるとは言われていない。「社会的・経済的総傾向 (ないしは「商品形式の分析」) を通じて」という言い方に注意する必要がある。「総過程」という語を含む先の一文では、「総過程」は (その意味範囲はどうかであれ) 「媒介するもの」であって、「文化上の諸事象」を直接規定するものとされているわけではない。このことによって、

(*) Vgl. GS V, S. 55.

(**) Vgl. GS I, S. 657, 677 u. 682.

(***) 第V, 第VI, 第XIV, 第XVI, 第XVIIの諸テーゼを参照のこと。

(****) Marx, a. a. O., S. 8.

(*****) a. a. O., S. 8f.

(******) a. a. O., S. 9.

アドルノは「経済優先」の俗流マルクス主義からは逃れている。

アドルノの立場は、基本的には「上部構造—下部構造」の二元論に基づいている。この二元論は「意識/存在」あるいは「主観/客観」の二元論に対応するものである（それがはっきりしているのはルカーチであり、彼においては「総過程」という語は古典的唯物論美学の枠内で、「客観的現実の総過程 Gesamtprozeß der objektiven Wirklichkeit」(*)というように使われる)。それに対して「序にかえて」で触れたベンヤミンの発想、つまり「上部構造を下部構造に移し入れる」という考え方は一元論である。文化的事象と経済的事象が一つの位相（これが何であるかがまさに問題となるのだが）の中で関連し合うわけである。実はこの発想はベンヤミンに即して言うなら、唯物論美学の袋小路からの脱出口を捜そう、という意図から生まれたものではない。認識論に関してベンヤミンは初期から一貫して、主・客二元論を克服しようとする姿勢を示してきた(**)。従って、このような思想的枠組の中に弁証法的唯物論が受容されたとき、二元論から一元論への変型が生じたのだと言うほうが実情に合っている。それはともかくとして、以上の考察から明らかになった重要な点の一つがある。それは、ボクダルの言う「基本的公理」は二元論を前提とするものであり、彼らがベンヤミンの一元化の発想をも採り入れようとするなら、そこには矛盾が生じずにはいない、ということである。

「総過程」についての第二の問題点は——認識論的あるいは解釈学的な問いになるが——それはどのようにして知られるものなのか、そしてそれは唯物論的美学においては、芸術の分析に先だって知られるべきものなのか、ということである。総過程を経済構造と解釈するならば、唯物論美学においてはまず経済分析が行われ、その後それがたとえば文学作品の分析と結びつけられることになるのか。そして実際の叙述もそのようになされるのか。無論アドルノの文化に関する著作は決してそのようには書かれていない。ここで重要になるのはやはり「媒介」と「規定」の意味にあると言える。

上のこととも関連するが、第三に、「全体と部分」という問題がある。しかもこれは様々な位相において出現するであろう。まずは（経済構造という意味での）「総過程」と文化的諸事象という関係がある。が、その他にも文化と経済と含む「全体」と個々の事象、そして文化のレベルでの全体と個々のものという関係も考えられるであろう。これらの問題をアドルノの諸著作に即して考えることは非常に興味深いことであろうが、本論ではベンヤミンにも関連する一つの事例だけを取り上げておきたい。それはこのベンヤミンとの論争の数年後に書かれた『ミニマ・モラリア』におけるものである。その序文の中で、この本の「方法はヘーゲルのそれに学んだものである(***)」と述べられている。これは実は「ヘーゲルのやり方に抵抗しつつもその思想を徹底(****)」させることなのであって、同じ意味で次のようにも言われている。「本書は、(中略)体系が提出する全体性への要求というものを忘れてはいないが、それに反抗することも忘れてはいない(*****)」。このように、『ミニマ・モラリア』は、全体性を意識しつつ個別にかかわる思索の書、体系的叙述を念頭に置いたアフォリズムの集成である。第一部中程には、ヘーゲルの有名な「真なるものは全

(*) Lukács, a. a. O., S. 624.

(**) このことについては拙稿「思考のロゴスとエートス——初期ヴァルター・ベンヤミンの批評理論の形成におけるその言語観・認識観・真理観の意味(一)」(東京大学文学部ドイツ文学研究室詩・言語同人会『詩・言語』第27号, 1986年, 所収)を参照されたい。

(***) Adorno, Theodor W.: Gesammelte Schriften, Bd. 4, Ffm 1980, S. 14.

(****) a. a. O., S. 15.

(*****) a. a. O., S. 14.

体である(*)」を逆転させた、「全体は真ならざるものである(**)」というテーゼがある。この一行は、雑多な内容をもついくつかのアフォリズムを集めた「小さな果樹」という題の章の最後にぽつんと置かれており、外的形式の上でもまさしく最も非体系的なあり方をしているわけである。そしてこの一句についてジェイは次のように述べている。「これは、彼がルカーチや初期のホルクハイマーのヘーゲル主義的マルクス主義から離れ去ろうとする動きを明示している。全体論的な主張にはそれがいかなるものであれ懐疑的であったクラカウアーやベンヤミンの強調した些末事研究こそが、今や明らかにアドルノの心のなかで第一等の地位を占めるようになったのである(***)。」ジェイの解釈は——この著者にふさわしく、と言うべきか——少々表面的であり、『ミニマ・モラリア』の序文で、些末事研究にあっても常に全体を意識するという弁証法的思考が強調されていたことを軽視している嫌いはあるけれども、ベンヤミンとの論争の時点におけるアドルノに関しては、ジェイの言う通り、まだ「逆転」前の状態、ホルクハイマー寄りのヘーゲル主義的マルクス主義の立場にとどまっております、部分よりも全体を重視していたと一応言ってよいかも知れない。

さて、ここで本論は次のような方向に進みたい。先のベンヤミンの反論のあとも、彼とアドルノとの間で手紙のやりとりが続き、結局ベンヤミンは改稿することを了承する。そして書かれたのが『いくつかのモチーフについて』である。これは『第二帝政期のパリ』の第二章「遊民」の改稿とされるが、そこには新しい「理論」的要素も加わっている。これは勿論アドルノの批判に答えたものであるが、しかしそれは、ベンヤミンがアドルノのヘーゲル主義的マルクス主義を受け入れ、その方向で改稿を行ったということを決して意味しない。本論では次章において、この新しくつけ加えられた部分を少し詳しく検討し、それによってこの新稿においてベンヤミン独自の唯物論的方法と言えるものが確立されているのかどうか、もしそうならそれがどのような性格をもつものなのかを考えてみたいと思う。

(未完)

(平成元年10月5日受理)

(平成元年12月27日発行)

(*) Hegel, Georg Wilhelm Friedrich: *Phänomenologie des Geistes*, in: ders., *Werke* (Theorie-Werkausgabe), Bd. 3, Ffm. 26. und 27. Tausend 1980, S. 24.

(**) Adorno, a. a. O., S. 55.

(***) マーティン・ジェイ (木田元・村岡晋一訳) 『アドルノ』, 岩波書店, 1987年, 53~54頁。